

魔法科高校の同級生

ジャパン太郎

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

特殊な家系に生まれた主人公が魔法科高校でできた彼女と三年間を激動過ごす

目次

彼女との激動の三年

1

彼女との激動の三年

4月8日 桜のシーズンまったただ中、俺、典堂（天堂、後に説明）上総 15歳今日から高校1年生

今日は国立魔法大学付属第一高校の入学式だ、俺は式の開始2時間前に到着した早く来たのには全くもって理由無く正直暇だった実はここには一度来たことがあり、見て回ってみたいところも無かった。

そこへ、「あのくちよつといいですか？」女性の声が聞こえた、振り向くと小柄だが女性らしいプロポーションをしたきれいな女性が俺のそばに立っていた、そして、

「あのく差しつかえなければ学校の案内をして頂けませんか？」

「まあいいですけど」

「ほんとですか!？」ものすごく喜んでる。

「ですが、何故ボクに?」

「それは……先ほどから全くそこを動いていなかったのでもしかしたら校内はもうすでに把握していて暇を持て余していたのではないのかと」

鋭い、ほぼ当たっている「しかし、先輩方に聞いた方が確実なのでは?」

「それは、私は年上の方と話すのが苦手で、しかも同い年の方に断られてしまって」

「?と、ふと思ったがその理由は次のやりとりではつきりとした

「分かりました、つでお名前は?」

「私の名前は……」

「どかしたんですか?」

「七:七草、真由美といいます」『七』、ナンバーズか!しかも七草とは、たしかに話ずらいかもなまさか初日に合うとは、しかし、

「そうですか、私は典堂上総っていいですよしく」ありきたりに振る舞った。

そして、七草さんに把握済みの校舎を丁寧の説明しながらたわいもない会話をし回り終わると、

「ありがとうございます、私は新入生送辞があるのでここで」といい別れた俺もそろそろ会場入りしなきゃな

そして、会場に入り誰も来なさそうな暗くて目立たないある意味特等席のような席を取った

しかし、五分後となり大柄のいかにも凄そうな奴がよって来た。

そして、「俺は十文字克人だよしく」

なに!?十文字ってまさか!『10』またナンバーズか!あり得ないまじか

内心驚きつつも「俺は典堂上総だよろしく、」と普通に？返した

「つでなんでここに？もつといいところあったんじゃないか？」

「ここが目立たずこの式を終えられると思っただけだから」俺と同じだ　と少し驚いた

「お前は壇上に行かなくてもいいの？」

「無論だ、学年主席は七草だから俺は生徒会でも、先生でもないからな」

そういえば、七草さんは送辞に行くって言ってたなと思いつつ

「じゃあよろしく」

「こちらこそ、よろしくたのむ」

そして、いろいろなことがあったが式は無事始まった少し疲れたこんなんでこれからやっつけていけるのだろうか？と式中ずっと思っていた…